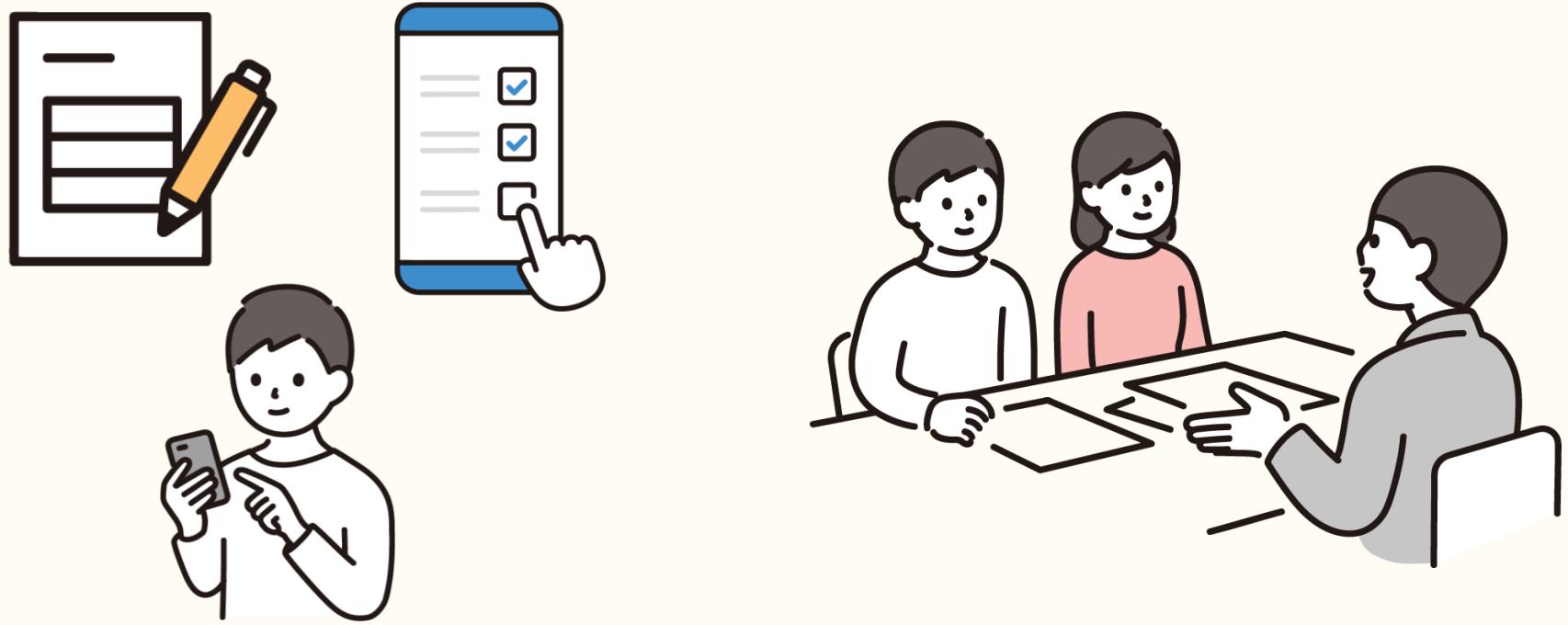


# 不登校の低年齢化に関する実態調査

## 調査報告書



東京都子供政策連携室

## 目次

<b>第1章：不登校の低年齢化に関する実態調査 調査結果 概要版</b>	<b>P3～P10</b>
「不登校の低年齢化に関する実態調査」の概要	P4
調査結果の概要	P5～10
<b>第2章：不登校の低年齢化に関する実態調査 定量調査 詳細版</b>	<b>P11～P38</b>
定量調査について	P13
調査結果	P14～38
<b>第3章：不登校の低年齢化に関する実態調査 定性調査 詳細版</b>	<b>P39～P59</b>
定性調査について	P41
調査結果	P42～59

※調査結果の分析のため、不登校の要因を子供、保護者・家庭、環境に関する要因等として分類しているが、  
**不登校の要因は複合的**であり、子供・家庭等に原因を特定しているものではない。

# 不登校の低年齢化に関する実態調査

調査結果

概要版

# 「不登校の低年齢化に関する実態調査」の概要

- ✓ 小学校1年生の不登校者数の増加率（2019年と2023年を比較）は**4.07倍**となり、不登校児童・生徒の低年齢化の傾向が見られた
- ✓ 都は令和7年度、不登校の**低年齢化の実態**に即した支援策の検討に活かすため、**実態調査**を実施
- ✓ アンケート調査とヒアリング調査を実施し、**不登校の低年齢化の要因**を分析

不登校児童生徒数（都内）			
	2019年度	2023年度	
小学校1年生	246人	1,002人	<b>4.07倍</b>
小学校3年生	722人	1,884人	2.61倍
小学校6年生	1,702人	3,755人	2.21倍
中学校1年生	3,365人	5,580人	1.66倍
中学校3年生	4,635人	7,641人	1.65倍

(資料) 東京都教育委員会「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」とび  
東京都生活文化スポーツ局「都内私立学校の児童生徒の問題行動・不登校等の実態」を基に作成

## アンケート調査（定量調査）

### ① 調査対象

都内小学校1年生・3年生・6年生の児童・保護者 各学年3,000世帯 計9,000世帯  
⇒ 全4,161世帯から回答

#### <質問例>

児童：学校の勉強は分かるか  
保護者：コロナ禍に伴う意識の変化 など

### ② 調査概要

学校生活や家庭生活の状況等についてアンケート

## ヒアリング調査（定性調査）

### ① 調査対象

ア 学びの多様化学校、教育支援センター、フリースクール等にいる児童 204名  
イ 区市町村の教育支援センター支援者等 40団体

#### <質問例>

児童：学校で苦手だったこと  
支援者：現場で感じる低年齢化の要因 など

### ② 調査概要

不登校の理由や低年齢化の要因等についてヒアリング

# 調査結果の概要

## (1) 小1の不登校児童の状況

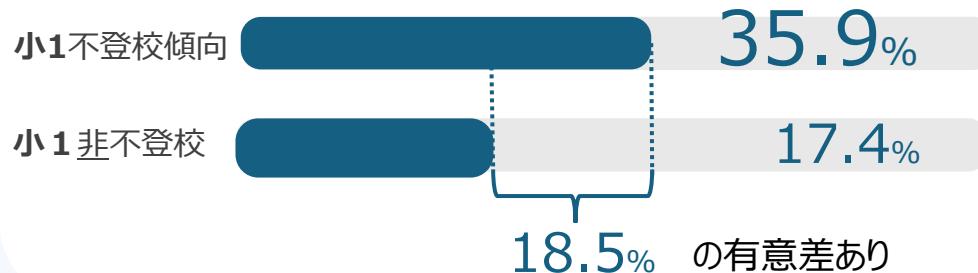
※不登校傾向：学校に行っていない、または登校渋りの様子が見られる子供

※非不登校傾向：上記以外

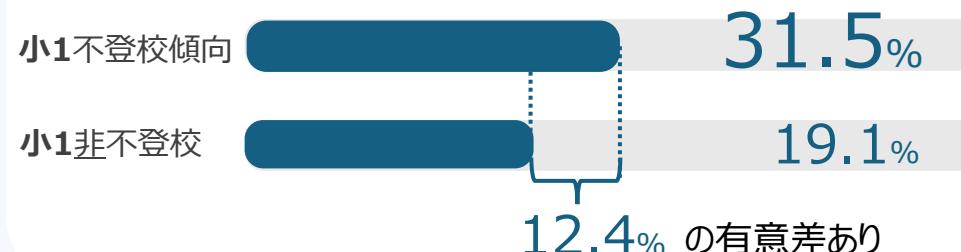
アンケート  
(子供)

### ✓ 不登校児童ほど「登校時間が楽しくない」・「デジタルデバイスの使用時間が長い」等の傾向

#### 朝、学校に行くまでの時間を「あまり楽しくない」・ 「全然楽しくない」と答えた割合



#### ゲームをしたり、YouTube等を視聴する時間 を「1日2時間以上する」と答えた割合



※なお、学年が上がるほど「登校時間が楽しくない」・「デジタルデバイスの使用時間が長い」傾向となっている

### ✓ 小1の不登校要因として、「勉強」や「担任の先生」等の影響は他学年に比べ少ない

#### 担任の先生が「すごく好き」・「少し好き」と答えた割合



#### 勉強は「すごく楽しい」・「少し楽しい」を選んだ割合



※友人関係についても、不登校要因への影響は少ない傾向が見られた

- ✓ 子供たちが学校で苦手と感じることは多岐にわたる

### 学校で苦手だったこと（選択肢を提示した上で、複数回答形式）

**勉強をする**  
(102人 (50%))

【主な声】

自分で勉強するのはいいけど授業が嫌

**人が多かった・うるさい**  
(80人 (39%))

【主な声】

以前いたクラスはうるさかった

**友達にはかにされた・いじめられた**  
(74人 (36%))

【主な声】

自分はバカにされてないけど苦手

#### ○その他の項目の回答

- ・話を聞く (66人 (32%))
- ・約束や時間を守る (63人 (31%))
- ・給食を食べる、休み時間 (52人 (25%))
- ・朝起きられない (47人 (23%))
- ・音や光がつらい (37人 (18%)) 等

### 支援者の声

- ✓ 入学後に**幼保とのギャップ**を感じてなじめない子供が存在  
 ✓ 発達障害や環境変化が影響しているとの見解もあり

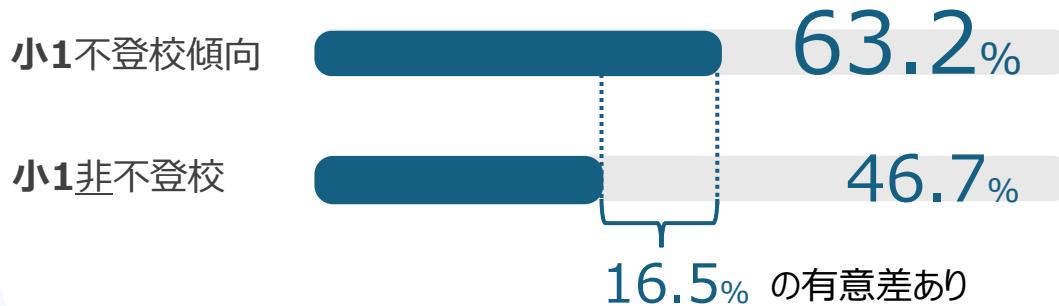
- ・保育所では自分の好きなことをしていたため、**小学校の決められたカリキュラムに慣れない子供が存在**
- ・小1の1学期で**集団生活が難しい**と感じ、「合わない」と表出する子供が増えている印象がある
- ・低学年では**発達障害 (ASD・ADHDなど)** の診断が**不登校の理由に含まれる**ケースもある
- ・**幼稚園・保育園からの環境の違い**により、急な集団環境への変化に適応できない

## (2) 小1の不登校児童の保護者の状況

- ✓ 不登校傾向の小1児童を持つ保護者の約6割が、入学前から不安を抱えており、他学年と比較して最も割合が高い

アンケート  
(保護者)

小学校入学前から、学校生活にはじめるか心配や不安を抱えている割合



特に小1で不安に感じている割合が高い



### 支援者の声

ヒアリング

- ✓ 幼保小の円滑な接続に向けた、行政から保護者への更なる情報提供が必要

- ・ 家庭での入学準備に関する情報や、低学年向けの子育て情報について、情報提供が一元的でない状況
- ・ 幼稚園や保育所等は家庭支援につなげやすい場であり、幼保の段階で、保護者に「困ったら相談してよい」という意識づけを行うことが大切

## ■ コロナ禍を機に保護者の意識が変化し、「学校を休ませる」ことへの抵抗感が減った

- ✓ 約半数の保護者がコロナの影響に伴い「無理やり学校に行かせなくてもよい」と思うようになった」と回答

アンケート  
(保護者)

### コロナ前と比較し、子供を無理に学校に行かせなくてもいいと思うようになった割合

小1の不登校傾向家庭と非不登校家庭の比較

小1不登校傾向

46.8%

小1非不登校

48.0%

### 支援者の声

ヒアリング

- ✓ コロナ禍を機に、「子供の意思の尊重」・「多様な学びの場の選択」という面でも保護者の意識・価値観が変化

- ・ 登校させることが重要という価値観ではなく、子供の意思を尊重する価値観に変化
- ・ テレワークにより、子供が休んでも仕事に支障が出にくくなった
- ・ 学校ではなく、多様な学びの場を選択する保護者が増えた  
(今的小1の保護者のほうが、上の世代よりも「無理ならフリースクールや家庭でもよい」と考える傾向が強いという印象)
- ・ 心身の健康が最優先という価値観から、子供の思いを大事にしたいと考える保護者が増加
- ・ 兄弟が不登校の場合、本人も不登校になるケースが多い

### (3) 小1の不登校児童を受け入れるための体制

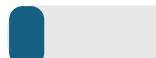
- ✓ 小1段階では、**母子分離への不安**を感じる家庭が多い状況

アンケート  
(保護者)

#### 「子供が離れたがらない」と回答した保護者 (複数回答)

小1不登校傾向  19.7%

小3不登校傾向  9.5%

小6不登校傾向  3.0%

主な回答 (保護者向けアンケート自由回答より)

- ・母子分離不安があり、7月上旬頃から不登校気味になった (小1)
- ・**保護者と離れたがらず**、家で母といたがる (小1)

#### 支援者の声

ヒアリング

- ✓ 児童一人ひとりの状況に応じた対応が必要

- ・小学校で校内別室や適応指導教室の整備が進めば、学校で過ごせる子供が増える可能性がある
- ・低学年の子供を受け入れるには、集団指導よりも**子供一人一人の状況に応じた個別対応**が必要となる

#### 不登校傾向の子供たちの声

※学びの多様化学校、教育支援センター、フリースクールにいる児童204人にヒアリング

- ✓ 先生に対して苦手意識があると不登校になる傾向

- ・2年生の**先生は厳しく**ていやになった。1年生の先生はいい先生だったけど、産休で変わっちゃった
- ・**担任ではなく**、図工とか音楽の先生と合わなかつた。

- 不登校傾向の家庭とそうでない家庭との比較を行うため、アンケート調査によって保護者と子供にそれぞれ出席状況や登校意欲に関する質問を行い、回答に応じて**不登校傾向・非不登校傾向**に分類（右記参照）
- 当初、子供が不登校傾向と回答した場合、保護者も同様に不登校傾向と回答する（保護者と子供の認識が一致する）と想定していたが、**保護者と子供の不登校傾向の認識に相違がある**ケースがみられた

Q : (子供は) 学校に行きたくないと思っていますか？

子供に登校渋り  
はない



**認識の差**

本當は学校行き  
たくないなあ

### 認識差の検証

**分類①**：子供と保護者の回答共に、不登校傾向に分類された世帯

12.5%  
(513世帯)

**分類②**：子供の回答には不登校傾向がみられたが、保護者は子供が不登校傾向と認識していない世帯

28.1%  
(1,156世帯)

**分類③**：子供の回答には不登校傾向がみられないが、保護者は子供が不登校傾向と認識している世帯

3.6%  
(147世帯)

**分類④**：子供と保護者の回答共に、非不登校傾向に分類された世帯

55.9%  
(2,302世帯)

※小数点第二位切上げ

保護者と子供の間に、**不登校・登校渋りに対する認識の差**が生じている回答が**全体の約3割**

- 子供の登校渋りのサインに保護者が気づいていない、子供が親に学校に行きたくないことを伝えられていない可能性が示唆
- 保護者が子供の登校渋りについて、過度に心配や不安を抱えている可能性が示唆

### 【参考：不登校傾向の定義方法】

#### ・保護者

- 子供の登校頻度が「週4日以下」と回答した場合、**不登校傾向（不登校）**とする
- 子供の登校頻度を「ほとんど毎日通っている」と回答した内、「子供に登校渋りの様子が見られることがある」と回答した場合、**不登校傾向**とする  
→保護者については、①と②の合算を不登校傾向と定義

#### ・子供

登校意欲の設問で、「学校に行きたくないことがある」の回答を**不登校傾向（不登校・登校渋り）**と定義

⇒以上の分類を基に、保護者・子供の設問ごとにクロス分析を実施

		保護者の回答		合計
		不登校傾向 に分類	非不登校傾 向に分類	
子供 の 回答	不登校傾向 に分類	① 513	② 1,156	1,669
	非不登校傾 向に分類	③ 147	④ 2,302	2,449
合計		660	3,458	4,118

□ :保護者と子供の認識に相違があった分類